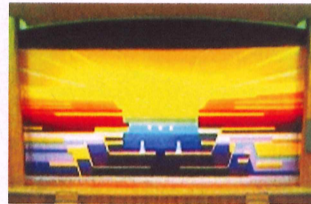
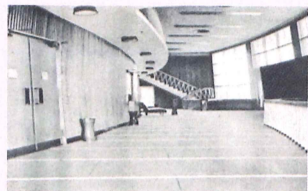
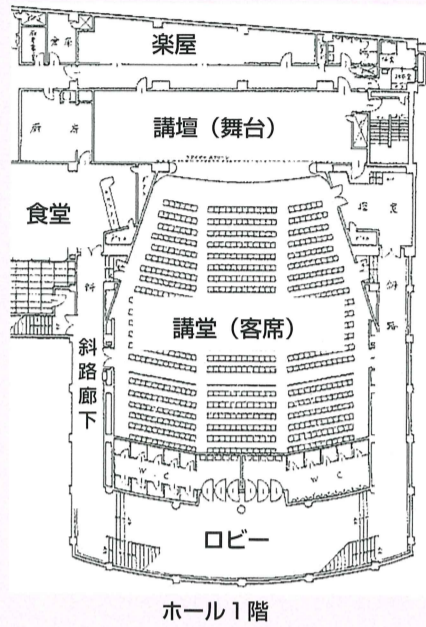


砂防会館ホール

「砂防会館ホール」は、多くの人々に「砂防」を知ってもらい、砂防事業の促進を図りたいという赤木の強い思いから、生まれた。

砂防会館ホールの施設と利用

砂防会館ホールは、砂防会館の南側にあり、800の客席と130㎡の舞台を持った劇場タイプのホールで、緞帳(どんちょう)は、砂防堰堤をあしらったものである。



昭和32年(1957)8月28日の砂防会館開館式に合わせて臨時の第18回砂防協会総会が砂防会館ホールで行われ、この年から総会や砂防協会主催の「全国治水砂防促進大会」、講習会等に利用されるようになり、公益的な事業が一段と促進されるようになった。また、一般の利用にも供された。

風格ある砂防会館ホール

砂防会館ホールはスロープと階段を組み合わせた構造のため、どの席からも舞台が見やすいこと、ホール内の色調が抑えられていること、観客の視点が舞台に集中できること、半地下構造のため音響効果も優れ、舞台から客席後部まで音の通りがいいこと、花道も付けられ日舞などにも対応できることなど、大ホールの風格を感じさせるホールであると評判を呼んだ¹⁾。中でも演劇系の使用が砂防ホールを特色づけることになった。当時の「砂防会館ホール」のパンフレットには、

「砂防会館ホールは千代田区の中央、赤坂見附坂上、都電平河町停留所に百歩、地下鉄赤坂見附町停留所に五分、しかも風光明媚且つ閑静にして都心最良の地に位し、之が建築は音響、色彩、換気等に最新を誇るのみならず、客席の出入りは一階のため至極便利にしては、観劇鑑賞に万全の意を注ぎ、演劇音楽会、舞踊会などいずれも満足にご利用願えると存じます」

と、記されている。都内にホール・劇場が少なかったこともあり、演劇の利用が進んだ。

砂防会館ホール



パンフレット

新劇の平河町時代

昭和32年(1957)9月18日から10月1日まで「劇団民藝」が「島」の初公演を行った。これが砂防会館ホールの演劇での初使用であり、その後「劇団民藝」の常打ち小屋として使用する契約が結ばれた。¹⁾³⁾⁴⁾

都内ではホール・劇場が少なかったこともあり、瞬間に砂防会館ホールは有名になり、一世を風靡することとなった。昭和34年(1959)3月に開館した近隣の「日本都市センターホール」とともに「新劇の平河町時代¹⁾⁵⁾」と言われ、多くの演劇ファンが平河町に集まった。

平成2年(1990)に閉館するまでの33年間に「劇団民藝」、「東京芸術座」、「劇団フジ」、「劇団ぶどうの会」、「文学座」、「俳優座」など85劇団により、延べ477回の公演が行われた。



砂防会館ホールでの演劇パンフレット(砂防協会保存)

「砂防会館ホール」を報ずる新聞・雑誌記事

①昭和32年(1957)12月28日のサンデー毎日⁶⁾
(日本都市センター建設中の記事)

「(前略)すぐ目の前の砂防会館と張り合って、定員千名のホールが出現するのが特色。(中略)『こんなところにホールをつかって、借り手があるのかね』昨年五月店開きしたころ、こんなカゲ口を聞かれた砂防会館側は、新設備を誇るライバルの出現に、神経をとがらせているらしい。「まあ、最近では新劇や舞踊、長唄などおなじみさんもでき、月のうち二十日くらいは売れています。同業者ができたほうが、かえって刺激になって商売繁盛するんじゃないかと思っています」という。(後略)」

②昭和38年(1963)10月21日の読売新聞⁷⁾
「新宿にホール二つ 新劇公演に明るい展望」

「(前略)いままで新劇の公演は、六本木俳優座劇場をはじめ丸の内第一生命ホール、平河町の都市センター・ホール、砂防会館など数えるほどしかなかった。このため秋の公演などは一年前から予約しなければ会場がとれないという状態で、公演期日は決まっているのに上演レパートリーは未定ということも珍しくなかった。(後略)」

キャンディーズ

「キャンディーズ」が、昭和52年(1977)9月28日に「砂防会館ホール」で公演したことがある。公演曲目は「ハートのエースが出てこない」など10曲であった。同年7月17日に日比谷野外音楽堂のコンサートで突然解散を発表し、さらに人気が沸騰した。その2ヵ月後のことであった。その時の公演DVD⁸⁾には「砂防会館ホール」での舞台が生き生きと映し出されている。

「シェーンバッハ・サボー」へ

昭和57年(1982)12月から1年4ヵ月、砂防会館別館Aの建築のために「砂防会館ホール」は休館したがその間都内に新しい演劇専用の劇場ができ始め、各劇団の平河町離れが始まった。平成5年(1993)の砂防会館別館Bの建築に合わせて、平成2年(1990)6月にその幕を閉じ、多目的に使える平土間形式の「シェーンバッハ・サボー」(ドイツ語で美しい砂防渓流)に生まれ変わった。

「砂防会館ホール三十三年のあしあと¹⁾」は、「赤木正雄が意図した『砂防』に対する大衆の意識啓発に役立ったことは確実で、ホールが総会、大会、講演会、演劇、舞踊等幅広く利用されるに伴い、世間に馴染みの少ない「砂防」という言葉の一般化を促し、砂防会館の存在も次第に認識されるようになり、多くの人々の「砂防」への理解を通じて砂防事業の発展に貢献してきた。」と記し、「ここで上演された名作の数々は『砂防会館ホール』の名とともにいつまでも人々の記憶に残ることであろう」と結んでいる。

参考文献

1) (社) 全国治水砂防協会：砂防会館ホール三十三年のあしあと、1991.12
2) 朝日新聞：劇評、素直に静かに原爆反対訴う 民芸「島」、1957.9
3) 劇団民藝：劇団民藝の記録 1950-2000、2002.7
4) 毎日新聞：“民芸”が常打ち契約 砂防会館のホールと 新劇界に新しい一拠点、1957.7

5) 財団法人日本都市センター：日本都市センター、—その15年の歩み—、1976.3
6) サンデー毎日：国会とその“待合室” 永田町周辺、1958.12.28号
7) 読売新聞：新宿にホール二つ 新劇公演に明るい展望、1963.10.21夕刊
8) 株式会社ソニー・ミュージックエンタテインメント：Candies Treasure Vol.1、2006

● 次回は、赤木の生家と少年時代

(一社) 全国治水砂防協会 赤木記念館 作製
砂防図書館 協力